

ビクター通信

5

病院給食の意義

市立総合病院 栄養科部長 岡庭信一

同 技師長 三澤重夫

わが国の近年における医学、栄養学の進歩はまことに顕著であるが、それにもかかわらず成人病である慢性疾患は年々増加の一途をたどっている。特に小児成人病など、成人病の若年化といった新たな問題が生じてきており、多くの成人病の発生には食生活が密接に関係していると考えられる。

エネルギーを過剰摂取すると肥満、糖尿病になりやすく、高脂肪食は動脈硬化症や心疾患の発病を促す。しかし一方では、豊かな食糧事情の中にあつて欠乏症を起こすなど、食事の欧米化によって今まで見られなかった疾患が増えてきた。がんや糖尿病と発生頻度とが関係している。病院給食は疾病に即した治療食を給与することを目的とし、医療の一環としての重要な使命を有するため、常に治療食事を研究開発し、近代的で科学的な管理、合理的運営が望まれる。病院給食の立場でみると、病気に食事療法そのものが治療

の基本となる疾患と、他の治療効果を高めるための補助的手段となる疾患との二種類がある。前者は内科疾患、それも慢性疾患に多く、特に肝臓病、じん臓病、糖尿病などは食事療法が治療の根幹をなすが、その効果を得るには正しい食事療法の長期間実行が是非必要である。化学療法や手術療法のように急速に効果が表れないため、軽視される傾向にあるが、慢性疾患そのものが長期治療を要するという

ことを十分認識すべきであろう。後者は、外科領域のものに多い。最近の外科栄養学の目覚ましい発達は、病態生理や病態栄養の解明を大きく進歩させ、術前、術後の栄養はその手術成果に重大な影響を与えるようになってきた。成分栄養や完全中心静脈栄養といった積極的療法が、手術成績の向上や手術後の回復状況などに大いに貢献している。病院の食事は、単に病気を治すだけのためではなく、家庭での生活管理の方法を習得させる

意味も含んでいる。退院後の食事のモデルであり、有効な指導媒体、体で覚えるための貴重な手段でもある。したがって、家庭生活における食習慣と違和感を覚えさせるようなものであつてはならない。医療にあつても食事は基本であり、高度な医療を施しても、食事が日常生活と掛け離れているようでは片手落ちといえよう。病院内での食生活も日常生活のリズムに近づけることが望ましい。合理的な食事は、患者の体力を支えて病気の経過を良好にし、回復を促進するものである。

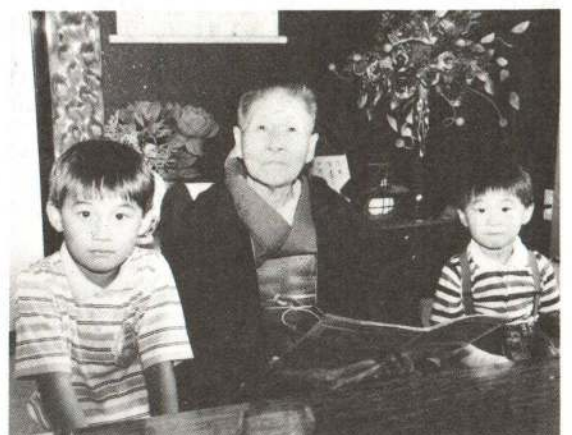
以上のように治療食の重要性は高まってきており、疾患そのものに対して代謝を調節し、あるいは臓器を保護して疾病治療の効果を上げ、その後の臨床予後に及ぼす影響が大きいことも認められてきている。高齢化社会への歩みの中で生まれた慢性疾患、成人病。その発症や進展の阻止、さらに予防の面からもきめ細かな食事療法が要請されているのである。現在、夕食時刻の繰り下げや保温食器の使用など、適時・適温給食に努め、アンケート調査では好評を得ている。またさらに複数献立の導入についても検討中である。病院給食が治療の一端を担っているといわれる現状を、これでお分かり頂けたと考える。

渡部タエさん 100歳 釈迦内字長面袋1

明治22年3月15日生まれ。「腹が丈夫何でも食べるから長生きしてる」とタエさんは言います。最近脚が少し弱ったそうですが、今でも針仕事をしてるんですよ。



お達者ですわね



明治22年5月1日生まれ。若いころは養蚕にこの人ありと言われたスエさん。今は耳が少し遠いけれど、ひ孫たちに絵本を読んであげたり、一緒にテレビを見たりと元気です。

岩谷スエさん 100歳 花岡町字猫鼻10-6